

# 中世・草戸千軒探検 ④ ～井戸に集う人々～

草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみがえる草戸千軒”をキャッチフレーズに、今からおよそ600年前の南北朝時代（広い意味での室町時代）を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復原したもので、博物館のメイン展示となっています。今回は市場の向こう、職人長屋の手前にある井戸についてお話ししましょう。

草戸千軒に暮らした人々の、毎日の生活に不可欠な水を得るための施設が井戸です。

言うまでもなく、井戸は地下水を汲み上げるために地中に掘った穴ですが、そのままでは土が崩れてしまうため、「井側」と呼ばれる筒状の枠を埋め込んでいます。井側の材質には木や石、あるいは陶器などがありますが、草戸千軒で最も多いのは木組みの井戸です。発掘調査で見つけることのできるのは地中に埋められたこの井側の部分だけですが、本来は地上部分にも展示室に復原したような「井桁」が組み立てられ、人や物が井戸内に転落するのを防いでいました。



井戸のたたずまい



釣瓶

井戸から水を汲み上げるための道具が釣瓶です。綱に結んだ柄杓や桶を井戸内に落とし、それを引き揚げることによって水を汲み上げていたのです。

草戸千軒町遺跡では約200基の井戸の跡が見つかっています。ただ、これは町の存続した全期間を通しての数で、同時期には20～50基ほどが存在していたようです。また、井戸はそれぞれの屋敷内にあったわけではなく、広場や辻のような場所にある一つの井戸を、多くの人々で利用する共同井戸だったと考えられます。



桶と柄杓

人々が水を求めて集まる共同井戸の周囲、すなわち井戸端は、日常生活に追われる人々の憩いの場となっていました。中世に描かれた絵巻物を見ると、頭上に桶を担って水を運搬する人々や、衣類を洗濯したり、洗濯物を干す人々などが集まっている様子が描かれています。

ところで、この時代の洗濯は足で踏むのが一般的だったらしく、井戸の周囲に敷いた板の上や、桶の中の洗濯物を両足で踏みつけている姿を絵巻物の中に確認することができます。



洗濯物

展示室を訪れたならば、ぜひこの井戸端で立ち止まり、耳を澄ませてみて下さい。きっとにぎやかな井戸端会議の声とともに、井戸から水を汲み出す音や、洗濯物を踏みつける音などが聞こえてくることでしょう。